

すずがも通信48

行徳野鳥観察舎友の会会報 1988年2月1日発行



特集

ヒヨドリ

市川 拓 画

シリーズ ニセアカシアの小道



ぼくが毎朝よく見る鳥のひとりがこのヒヨドリ君です。

ヒヨドリ君に出会ったのは、友の会に入ってまもないころ（だったと思う……。）学校の行きや帰りに、そして観察舎の行きや帰りに、よくまあこんなところにいっぱいいるな、と思いながら毎日なんとなく見ていました。

今、考えてみればスズメの次にしぜんと覚えた鳥のひとりなのです。家のまわりにいっぱいいるヒヨドリ君、けど、またお目にかかってない巣と雛、今年はなんとしても見たいです、ぼくの、家のあたりで……。

この鳥がきらいだ！！という人が近所にいます。おそらくあのピーヨ、ピーヨと鳴く鳴き声とあのベトベトしたふん、がきらいなんだと思います。そして、ぼくがこの鳥が好きなわけは、色や大きさはオナガのほうがきれいで大きいけど、スマートな点ではこのひともまけないでしょう。体の色の灰褐



ヒヨドリ

色の、あの鳥の、あのひとの、あの耳羽のタヌキみたいな褐色の けなげでかわいい姿が好きなのです。（なんとなくあいきょうがあるしね。）

ある本で読んでわかったことなんです、このヒヨちゃんが、あ、いや、このヒヨ君じゃなかった、おヒヨさまがですね、マンションのベランダの植木の木の枝にですね、なんと！！巣を作ったんでごじやります。はじめはうそだろ！！と思ってたんですがほんとだったんです。ぼくは巣を作るのは公園や庭の木だとばかり思っていたんですっかりおどろいたというか、感動したというか、一応おどろきました（ということにします）。しかも、部屋から巣も雛も見えているというのにもかかわらずおヒヨちゃんはですね、それを気にせず、せっせと餌をはこんでいたそうです（ぼくも見なかったです）。ずいぶんとどきょうがあるなあと思いました。

さて、このおヒヨさまの特徴はといいますと、まず鳴き声はさきほども書きましたが、ピーヨ、ピーヨとするとく鳴きます。大きさはスズメより大きくてツグミくらいの体ですが尾が長いために大きく見えます。背が黒っぽく胸には灰色の地に白いまだらがあり、ほおのところがくり色になっているのが特徴です。L 27、5cmくらい。餌台のパンや庭木の実、昆虫を食べ、またツバキやサクラの花の蜜や、キャベツの葉やコブシの花卉などを甘いものが好きです。深い波形をえがいて飛び歩くことはほとんどありません。

ヒヨドリあらかると

さくらどり；ヒヨドリの地方名の1つ。満開の桜にはたいていヒヨドリが来ていて、花を食べています。お花見に行ったら探してみてね。

ジュースとフルーツ；大好物。ツバキの花に頭をつつこんで蜜を吸っているのもよく見かけます。ともかく甘いものが大すき。柿、みかん、りんご、ジュース、はちみつ水、さとう水、その他。

快進撃・大躍進；ヒヨドリは村落や山地の鳥で、今のように町の中で巣を作るようになったのは、ここ15～20年の間のことです。東京の市街地ではその前はれっきとした冬鳥で、ヒヨドリの声を聞くといかにも秋が深まった感じがしたものでした。1967年ごろから町田、府中などで夏に残るヒヨドリが見つかるようになり、東京農工大で初めてヒナが見つかったのはたしか1968年です。それからほんの数年の間に、みるみるうちに東京23区のあちこちでヒヨドリが巣をかけるようになり、今ではどこでも1年中ヒヨドリが住みつくようになりました。

行徳でのヒヨドリの繁殖開始はたぶん1976年です。77年にはあちこちで越夏が見られ、翌年には夏のヒヨドリは珍しくなくなりました。今ではご存じのように、公園やマンションの庭、街路樹などところらわず巣をつくっていて、ごく普通の留鳥になっています。

ヒヨドリの大進出の理由は、人間が作りだした都会の環境を、遠慮えしゃくもなく大胆に、上手に利用したためと考えられています。

市川の北部では；行徳と違って丘陵地帯だった市川北部では、ずっと昔からヒヨドリは普通に繁殖していたそうです。東京都の狭山丘陵などでもそうでした。

ヒヨドリの赤ちゃん；ムクドリのひなによく似ていますが、頭の羽がうすく、足やくちばしはちょっと赤っぽい灰色で、ピーピーと高い声で鳴くので見分けができます。ずいぶん小さいうちに巣立ちをするので、まだ飛べずに保護されるひながよくあります。ひと晩おいて餌をたっぷり食べさせ、翌朝拾った場所に行ってみると、たいていは親鳥や兄弟が近くについて、何とか一緒にについていけるようになっています。



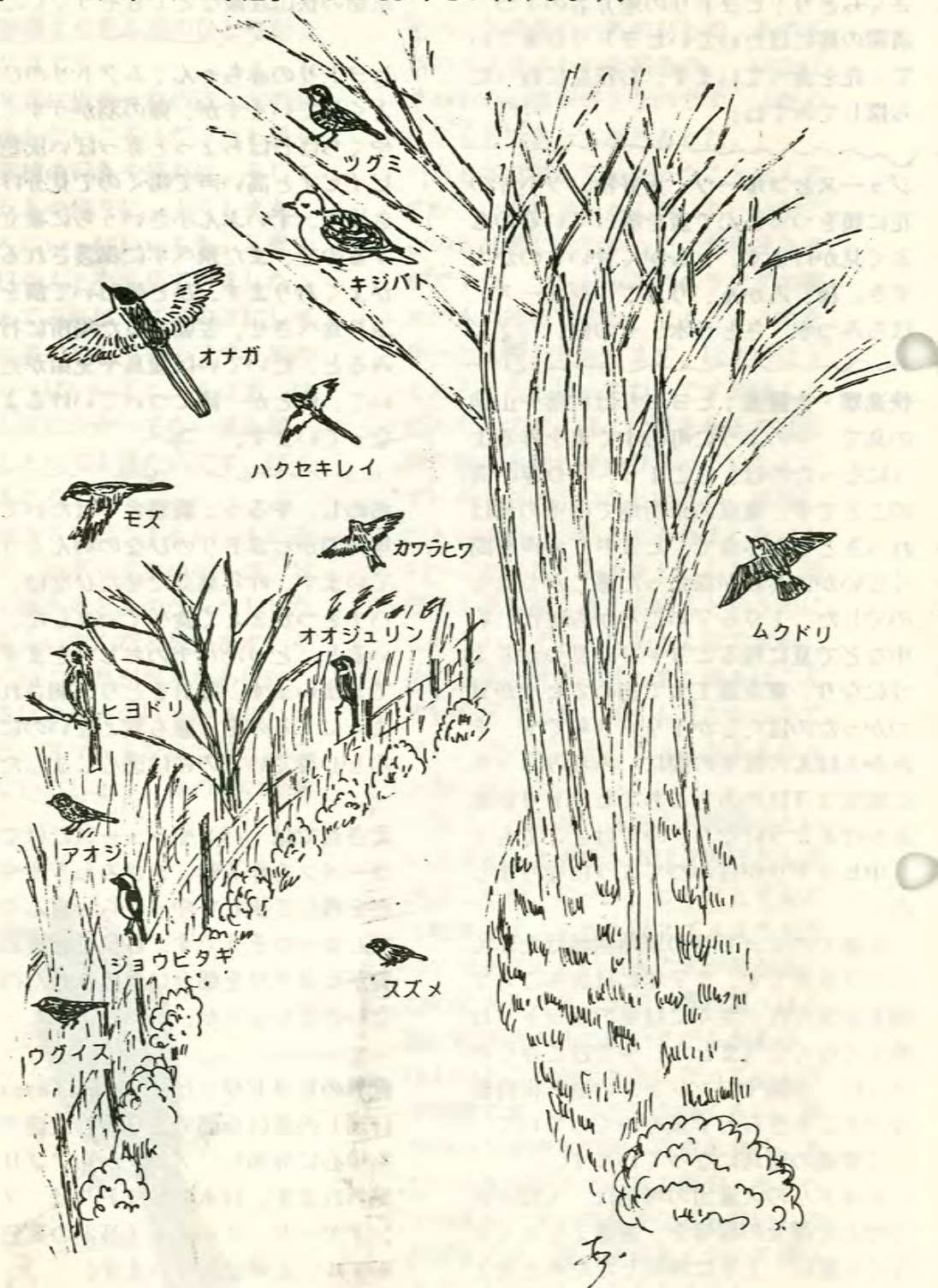
おぬし、やるう；観察舎ではたいてい毎年何羽かヒヨドリのひなのめんどろをみています。昨年巣立たせたひなは、よくハチをつかまえて食べていました。見てみると、とったハチのおしりをまず食べてしまいます。毒針をとり、刺されないようにするのを、誰も教えないのにちゃんと心得ているのには感心しました。

えさ台では；パンやジュースだけでなくラーメンを作る時、きざみねぎややきぶたを残して出してやったら、喜んで食べてしまったそうです。好気心と進取の気質がヒヨドリを都会に進出させたのではないのでしょうか。

世界のヒヨドリ；ヒヨドリ属（Hypsipetes属）の鳥は全部で20種。東南アジアを中心に分布し、アジアからアフリカに見られます。日本のヒヨドリは、ブラウンヤード・ブルブル（耳羽の茶色いブルブル）と呼ばれています。

ここはニセアカシアの小道です。

駐車場から野鳥観察舎までの遊歩道。足をとめ、耳をすますと、自然の息づかいが感じられます。「ニセアカシアの小道」からのたよりをお届けします。



遊歩道に入り、駐車場の角を曲がったとたん、目に入る緑 車もなくビルもなく、思わずほっと胸がなごみませんか？でも、ニセアカシア並木の向うに見える観察舎へ、観察舎へとついつい心ははやりがち……ちょっと足をゆるめて、あたりを見回してみてください。右手のニセアカシアの梢を、左手の葦原の中を、小鳥達が行き交い、上空をサギやカモメが飛び、そして足元には小さな草花が咲き乱れています。ここは「ニセアカシアの小道」 あなたはもう、自然の世界に足を踏み入れているのです。

ニセアカシアの小道の草花たち

オオイヌノフグリ セイヨウタンポポ ナズナ ハコベ
ヒメオドリコソウ ホトケノザ



はとおと

新しい年になりました。

昨年夏、保護区内に造った2つの池の前に立つと、昨年1年間の歩みが思い起こされます。

おかげさまで、この2年間で友の会はずい分と成長したように思います。丸浜川には3台の水車が設置され、ススキ野原に池ができ、月1回の底生生物調査も、毎月1度も欠かさず続いています。

しかし、その反面、行徳周辺の環境悪化も進んでいます。妙典の蓮田はもう9割方が埋め立てられ、残された数枚の蓮田での最後の収穫が終わると全面が埋め立てられてしまいます。野鳥の数もすっかり減り、もう2年前の面影をしのぶこともできません。1月15日のカウントでも、蓮田を冬の餌場としていた、コガモ・ハシビロガモなどの淡水カモ類や、ダイサギ・コサギなどのシラサギなどがすっかり減り、また、セイタカシギが今回はとうとう1羽もカウントされませんでした。

(P8参照)

京葉線の開通を控え、保護区南側にできる予定の新行徳駅周辺の開発も進

東 良一

む一方です。また、都心の狂乱地価のあおりを受けてか、行徳の空地という空地には次々とビルが建築されています。

周辺の開発が急ピッチで進む中で、保護区の自然はますます大切なものになりつつあります。それだけに、保護区内を1日でも早く湿地化し、水鳥の生息に適した環境にしたいものです。友の会の保護区の湿地化実験はまだほんの1歩を踏み出したばかりです。今年は、水鳥の繁殖に向けて池の整備をするなど、実験を更に進めていきたいと考えています。調査・作業など定期的に行いますので、ご興味がおありの方はお気軽に御参加下さい。



鳥の国から

蓮尾 純子

スズガモがいない。スズガモがいないと元気が出ない。ここのところ、どうもぱっとしない気分です。12月からこっち、万を越えたのは12月24日だけでした。千羽でも、いえ、百羽でも入ってくればよいのですが、千羽近くの群れが見られたのもほんの数日で、ものみごとにスズガモがいないのです。おまけに例年第2位を占めるヒドリガモも少ないので、保護区全体のカモ（新浜鴨場を含めて）が4千羽そこそこの状態です。まあ、考えてみれば4千羽というのは決して少ない数ではないのですが、何ともさみしい限り。

スズガモたちは海にはちゃんといるようなので、密猟がなくなって安心できるという理由で、わざわざ保護区に逃げこむ必要がなくなったのだらうと思っています。それにしても、眼前を埋めつくすカモの大群がいない水面の広さ。

カモが少ない割にはタカ類はあたり年らしく、チュウヒ、トビ、ノスリなどが入れかわり立ちかわり見られます。何気なく見上げたら、小さな白雲を浮かべたまっ青な空の高みに、ゆうゆうと舞うトビ7羽。高度1000m。伊良湖岬を渡るタカはきっとこんな様子だろうと思って見とれてしまいました。

丸浜川でコガモがさかんに採餌しているのを見ました。ひさしぶりです。さかだちして食べていたのは、たぶん珪藻でしょう。



ちょっと気分をかえて、野鳥病院の患者さんの紹介をしてみましょう。このところ、旧館二階の研究室兼病室にいる重症患者のトビ君が自分から餌を食べるようになって喜んでます。これは昨年7月に入院した鳥で、ちょうど人間の脳こうそくのような症状を見せています。意識ははっきりしていて足や翼は動かしますが、全体のバランスがとれず、立ったり姿勢を保つことができません。それでもけんめいにリハビリをやって、やわらかい干草をしいた病室の中で、1日中ばさばさとはばたいています。そのかいがあったのか、12月ごろから足指でものをつかめるようになりました。そして、1月には餌の魚を渡すとちゃんと受け取ってのみこみ、落としたのを拾うことさえやってのけたのです。体を起こしてすわっていることもできます。どこまで回復が見られるか、楽しみにになりました。

翼を折ったハマシギとシロチドリが新しく入院しました。いつもだと餌を自分で食べるまで結構かかるのですが、幸いに先輩格のハマシギが3羽います。普通生き餌しか食べないシギ・チドリ類にはミールワームという虫を与えますが、これだけでは栄養がかたよってしまい、健康が保てません。長期飼育のハマシギたちは、金魚の餌を主食にし、シラスやサクラエビなどを時々まぜています。あとからはいった連中と一緒にしたところ、ちゃんと先輩の食べる餌を信用したらしくその日のうちに餌付いてくれました。どちらも翼が折れているので野外には戻せませんが、できるだけ居心地よくしてやりたいと思っています。

水仙が花ざかり。ニワトコの芽が丸くふくらんできました。春はもうすぐ。

水車ニュース

「ヘーえ、たいしたもんだねえ。」
ピンセットでつつきまわすと、いるわ、いるわ、何とイトミミズ337ひき！最初に設置された水車“せせらぎ1号”のところの測点3です。採泥器で採取された水底の泥、約10リットル（泥の表面積としては約700cm²）の中にそれだけいたのです。1月24日の底生動物調査の日のこと。

この場所に水車が動き始めたのはおとしの5月3日から。その年の7月に、初めてユスリカの赤虫が1ぴきとれました。無酸素状態で水がまっ黒になるような日が続くと、ゼロ記録に戻ってしまうこともありましたが、昨年の2月に水車が3台になってからは、どうやらいつも生物が見られるようになってきました。とうとう3ヶ所。ちょっとしたものではないかと思えます。

これと対照的なのが丸浜川の上手に近い測点6（観察舎入口の駐車場のところ）。調査を始めたころには一番生物が多かったのに、昨年の春ごろから無生物状態が時々見られるようになり、夏以降は観察舎の餌場前（測点4）とならんで生物が最も少ないところになってしまいました。

餌場前の水底に生物がいないのは、すぐそばにしゅんせつでできた深みがあり硫化水素などの毒物が多量に発生していて、ほとんどいつも無酸素状態になっているからだと思われます。でも測点6はどうして生物が住めなくなってしまったのでしょうか。

測点6があるのは、“欠真間三角”と呼んでいる昔の舟だまり跡です。ここの泥の状態を見ていると、おとし調査を

始めたころよりずっと悪くなっているようです。泥が黒く、臭気も強くなりました。おとしは家庭から流れこむ生下水が中心だったのですが、今の水は主に湊排水機場または猫実排水機場の遊水池から流れてくる、酸素を使いきった滞下水です。生下水よりいっそう汚れた状態と考えてよいでしょう。生物がいなくなるのも当然です。

その同じ水が丸浜川全体に流れるわけですが、水車のそばなどで生物がふえていることは、水車による酸素量増加のほかにうまく説明ができません。たぶん、せせらぎ1、2、3号がなかったとしたら、丸浜川全体は確実に死の川になっていたでしょう。今でも水車を止めればいつでも測点6と同じような無生物状態が戻ると思います。何となく、責任重大という気がしませんか。

もうひとつ、ちょっとこわいお話。
観察舎にずっと前からあった小さい電動ポンプをお借りして、しゅんせつでできた深みから水をくみ上げてみました。まわりより50cmほど深くなっているだけなのですが、海水の半分ほどの濃度の濃い塩水がたまっていて、比重が重いので、水の入れ替えがあまり起こらず、水質が極端に悪くなっています。くみ上げた水は黄色くすきとおりで、何と硫化水素を90ppmも含んでいました。硫化水素は0.4~4ppmで魚を殺す有毒ガスです。ありがたいことに、空気にさらすと硫化水素は硫黄にかわるので、ただポンプでくみ上げて、泥や枯れ葉の上を通してから川に戻すだけで、硫化水素の量はずっと少なくなります。硫黄が白々と地表に析出しているのは、まるで火山の噴火口みたいでした。少しでも硫化水素を減らせることを期待しています。

水鳥カウントデータ

調査日 1988年1月15日

種名	新浜保護区A	新浜鴨場B	行徳海岸C	江戸川放水路D	原木E
出現個体数					
カイツブリ	14	1	8		
カワウ	15	17			
ゴイサギ	55				
ダイサギ	5	1			
コサギ	3	1			5
アオサギ	16				
マガモ	96		16	12	
カルガモ	241		1		
コガモ	197	33		14	2
ヨシガモ	5	4			
オカヨシガモ	32				
ヒドリガモ	478	290	10	14	
オナガガモ	290	1040	6	400+	13
ハシビロガモ	24	4	1	14	1
ホシハジロ	17	360	1		7
キンクロハジロ	10	22			8
スズガモ	90		35,499+	859	
ホオジロガモ	1		65+		
ウミアイサ			2		
トビ			1		
ノスリ	2				
チュウヒ		1			
チョウゲンボウ	1				
キジ	1	2			
バン	3				
オオバン		9			2
シロチドリ	33				
ダイゼン			2		
オジロトウネン	1				
ハマシギ	67			345	
アオアシシギ	1				
イソシギ	3				
タシギ	3				17
ジシギ不明種		1			
ユリカモメ	223		8		3
セグロカモメ	244	2	4		

	A	B	C	D	E
キジバト	9	21			1
カワセミ		1			
ヒバリ				1	
ハクセキレイ	9	2	8	3	25
タヒバリ	2			7	
ヒヨドリ	16	27			24
モズ		2	1	1	2
ジョウビタキ	2	1			1
シロハラ		1			
ツグミ	32	2		8	6
ウグイス	4	8			
シジュウカラ		1			
メジロ		1			
ホオジロ					5
コジュリン	1				
カシラダカ		3			
アオジ	12	14			
オオジュリン	27	3			
カワラヒワ	9	5			4
スズメ	66	160	13		70
ムクドリ		1	3	3	89
オナガ		21			
ハシボソガラス					2
ハシブトガラス	2	1			2

参加者：赤田秀子・康和、川上秀明、阪本卓也、白石隆徳、鈴木晃夫、鈴木希伊、鈴木博之、泰楽正、高田賢一郎、角隆博、長尾朋子、新妻途夫、三浦典子、矢野耕一、若本康平

がん・かもいっせいカウントを終えて

一変わりゆく原木に想うこと(源氏物語調で)一

赤田 秀子

例年になく、暖かい「ガン・カモいっせいカウント」でありました。それなのに、息子とともに我家の周辺一帯を廻って、江戸川へ出た私どもの心はお天気とはうらはらに、寒々としたものでございました。と申しますのは、ここ市川市の原木は江戸川放水路と京葉道路にはさまれた一郭で、真間川の両サイドには蓮田と水田がつづいた小

さな農村でしたのに……。東西線開通以来、住宅地として徐々に開発され、ことにこの4、5年の変化は、「えっうっそー!!」と叫びたくなるような現実なのでございます。



つい、この間まで、セイタカシギやツルシギが飛来し、餌かせぎをしていた水田は、いまやヘンゼルとグレーテルを誘い込んだ魔女の家の如き、カラフルでメルヘン的な家がぎゅうぎゅうと建ち並んでいるのであります。アカエリヒレアシシギが遊んでいた蓮田はレタス畑に変わり、その後駐車場になってしまっているのです。我々が「セッカの小道」と名付けていた農道もいまは立派に整備され、両側の葦原も埋め立てられ、夏になったら、オオヨシキリ君、やってきても途方に暮れるで

ありましょう。毎朝、我家のベランダから「おはよう」とあいさつしていたカモ達も、この冬は、ベランダの下の水田に全く寄りつきません。無理もないのです。水田の半分は秋から埋め立てられ、なんと現在、R・マンション建設中なのですから。ガラス笛を吹くようなコガモの声の代わりに、クレーン車の音を聞かされ、私などはこのところ体調をく

鳥信致します

1月6日 谷津干潟

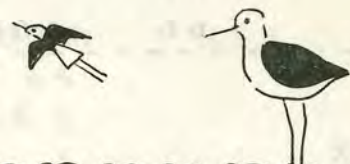
ヨーロッパトウネン	1羽
ヒメハマシギ	3~4羽
オバシギ	1羽
ダイシャクシギ	5羽
ズグロカモメ	1羽

ヨーロッパトウネンはハマシギの群れのはずれにいて、大きさもずっと小さいのですぐにわかりました。ところが、ヒメハマシギの方はハマシギより少し小さいだけでほとんどハマシギと見分けがつかないので探すのに一苦労潮がかなり満ちて、シギが南の遊歩道入口付近に集まっている時が見易いようです。

ずし、更年期障害をおこしかけているのでございます。

「ひどいよねえ」「どうしてくれるの」、息子と私はおつくさ言い合って過ごした、カウントの一日でありました。それでも、昔のよしみで姿を見せた鳥たちはリストの通りです。この日ささやかな慰めだったのは、巣立って間もないモズの幼鳥に出逢っていること、善造の沼と呼ばれる沼地には当分手をつけならしいことの確認ができたことでした。

しかしながら、我々は決意しています。よーし、カモやサギが減り、シギやチドリが姿が見えなくなっても、ムクドリ、ハクセキレイ、ヒヨドリがふえても……はばたくものがあるかぎりこの原木をフィールドにせずと見届けてやりますぞ。



馬越 靖子

1月6日 幕張海浜公園

ミヤコドリ	4羽
ホオジロガモ(おす)	4羽
ハジロカイツブリ	4羽以上

残念ながらお目当てのコクガンには出会えませんでした。

JR南船橋



行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜観察会(毎月第2日曜日) 2月14日、3月13日

集合:東西線行徳駅前 午前10時

解散:行徳野鳥観察舎 午後3時頃

担当:東 良一

持物:昼食、飲み物、バス代(大人290円、子供150円)

江戸川土手をカモやシギを観察しながら河口付近まで歩きます。河口付近で昼食後、バスで保護区へ。カモ達もそろそろ北の国へ帰る仕度を始め、代わってツルシギやコチドリが春の便りを持ってやってきますよ!

☆定例園内観察会(毎月第1・3日曜日) 2月7日・21日、3月6日・20日

集合:行徳野鳥観察舎前 午後1時半

解散: 〃 午後3時半

担当:観察舎 蓮尾、協賛 友の会

北風はまだまだ冷たいけれど、ほら、足下はもうすっかり春。オオイヌノフグリやハコベが咲き、枯れ草がいつの間にか緑のじゅうたんにかわっています。新池にもツルシギやコチドリがきつとやってきますよ!

☆夕暮れ観察会

2月28日(日)、3月27日(日)

集合:行徳野鳥観察舎 午後4時半

解散: 〃 午後6時頃

担当:観察舎 蓮尾

夕暮れ時は鳥達が一番動く時間帯です。ネグラへ向かうサギやムクドリを観察しましょう。冷え込みますので、暖かい服装でどうぞ。

☆丸浜バードリバーを調べよう(毎月第4日曜日) 2月28日、3月27日

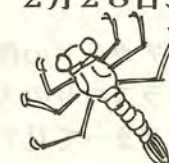
集合:行徳野鳥観察舎 午前10時

解散: 〃 午後3時頃

担当:東 良一、矢野耕一

持物:長ぐつ、タオル、ビニール手袋、昼食

おかげさまで丸浜川にはすっかり生物(アカムシとイトミミズ)が定着した様子です。新池では丸々肥ったアカムシやヤゴがそれはたくさんみつかります。午後から視聴覚室でソーティグをしています。ヤゴの本物を見たことありますか?



☆観察してみよう!ヒヨドリくん

2月20日(土)

集合:行徳野鳥観察舎 午後1時半

解散: 〃 午後3時

担当:東

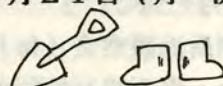
いつも何気なく眺めているヒヨドリくんをじっくり観察してみましょう。

☆新池観察会

2月11日(木・祝)、3月21日(月・祝)

集合：野鳥観察舎前 午後1時半

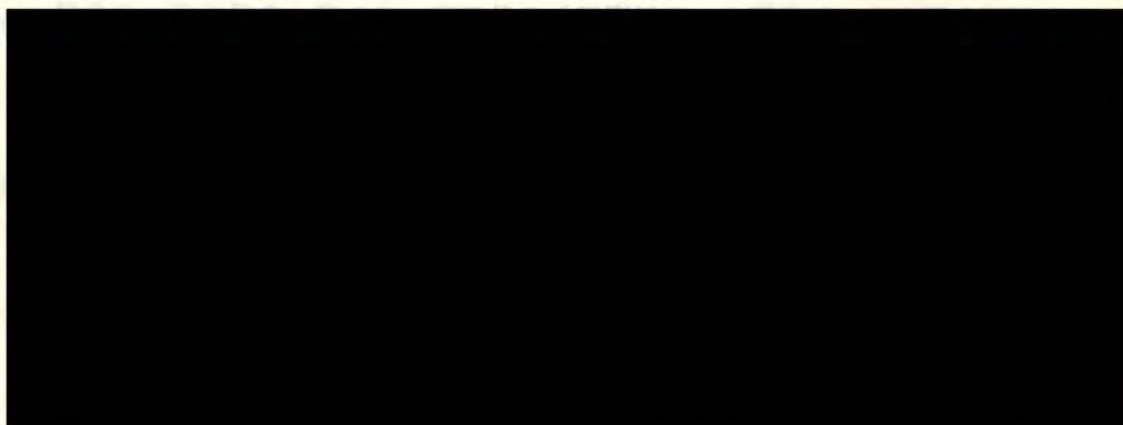
解散： 〃 午後3時頃



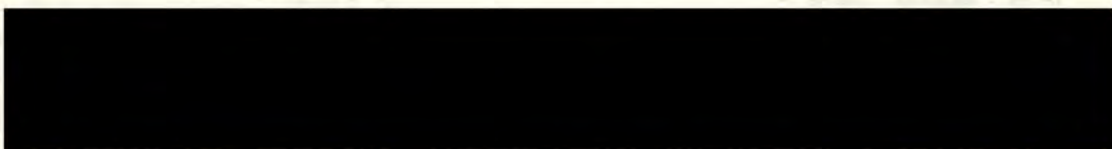
持物：池の整備を手伝って下さる方はタオルと長靴持参。汚れてもよい服装で！！

展示を見ながら浄化の仕組みを考え、その後、実際に保護区に入って丸浜川の水が池に導かれ浄化されている様子を観察します。そろそろ繁殖期に向けて池の整備も始めなければなりません。池の中に入ってアシを抜いたり、水路を掘ったり、いろいろ作業がありますので、時間と体力がおありの方は是非お手伝いください。

新 入 会 員



住 所 変 更



編集後記

フェンス工事やニセアカシアの枝おろしで、芽吹きまでちょっと殺風景になりますけれど、ガマの穂綿やキカラスウリの大きな実など、観察舎までのアプローチはいつも面白いものがいっぱい。立ちどまって見てくださいね。モズの求愛も見られるそうです。(純)

1月の10日過ぎになんともオオイヌノフグリが咲いていました！冬が暖かいというより、春がとっても早く来たという感じで、すごく得をした気分です。(馨)

すずがも通信 No. 48

1988年2月1日発行

発行所 行徳野鳥観察舎友の会

年会費 一般1000円、ジュニア500円

発行人 東 良一

事務局

編集 蓮尾純子、東 馨子

行徳野鳥観察舎